環 境 と 人 間
― 二重の危機の存在論的構造と克服の課題 ―

犬塚潤一郎

生活文化学科

Environment and Man, a Double Crisis
The Subject of Reconstruction of the Harmony in Recognition and Society

Jun-ichiro INUTSUKA
Faculty of Human Life Sciences

When regarding global environment problems as a structural result of human activities, it is thought that it is ontologically the same as the crisis of the individual existence in modern society. In order to find a way out of the double crisis, it is required to reconstruct the "world" for man in ontological recognition and the reality of local life.

Key words：global environment（地球環境），exploitation（収奪），post-modernity（脱近代化），décroisssance（脱成長），localization（ローカリゼーション）

はじめに：分散する危機感

地球環境問題には、認識と対処の問題があり、その問題性はスケールにある。我々はまだ､地球的（グローバル）な規模の問題に対して、物理的、政治的、文化的に統合されたものとしての、充分に正確な尺度を持っていない。

エネルギーと天然資源供給の減少・枯渇、生物多様性の破壊、気候変動による社会基盤（農業、都市）の崩壊など、トピックとしての環境問題が取り上げられない日は無いが、それらが提示している危機状況に対して、個人も政府も、国際的な政治の舞台も、充分に集中することができない状態が続いている。"危機"はそれが人類の、あるいは文明の規模を持つものであり、時期は差し迫っていると告げられている。しかし人が日常的に抱いている"危機感"はそれだけではない。より身近で、より緊迫したものとして受け止められているものが他にも多くあるのだ。意識は、円高、少子化、景気、雇用、あるいは人間関係など多くのことに分散し、人類も文明も、その中では相対的な問題でしかないようだ。

人類の起源と先史を探求する学によれば、５～４万年前に急速な道具の進歩がはじまったという。そしてこの人々と現代人には、遺伝子上の違いはないというのだ。つまり、我々現代人にとっての、直接的に外界の変化を知る感覚器官の諸機能は、氷河期にマンモスやトナカイを追っていた人々と、生理学的に同じものだということだ。いやむしろ、あまり使われないことによって大きく鈍ってもいるだろう。感覚器官を通して我々に現れる世界は、彼らのものほどには生き生きともしていず、密度の高いものでもないのだろう。見るもの、触るもの、歩き回る世界、吸い込む空気さえ、我々のものはずっと乏しいに違いない。しかしそれでいて我々は、彼らのものよりも格段に広く複雑な世界に生きていると感じている。それは我々にとっての世界が、直接感覚によってとらえれる空間的、物質的なものよりも、はるかに多くの観念的、社会的なものによって満たされているためである。

その意味では、我々の危機感の多くが、人類を取り巻く外環境の問題よりは、社会を生き抜くことの不都合さに向けられているのも当然だろう。社会についての多量の情報が、現代的メディアを通じて我々の意識を溢れさせ、そして絶え間なく通り過ぎてゆく。19

世紀末には生産財としての自然の価値は急速に低下し、今日では大半の人間にとって、日々の生存の条件は金銭経済の内にある。

このような人間の意識と世界の現実においては、直接的な環境の問題の占めるところは限られてしまうか、あるいは人間の社会への影響の現れ方へと閉じ込められ、社会問題の様相へと位置を変える。地球環境問題に対して警鐘を鳴らす人は、ことさらに危機をあおるばかりだと非難されもする。それでなくても社会は、労働は、家庭は、心身は、複雑な危機を抱えているのだからと。

しかし、人間社会への現れとしても、深刻なエネルギー不足や資源枯渇、気候変動による大規模な災害の繰り返し、食料と真水の恒常的な不足が、地球規模で引き起こされるのが直近の、せいぜい数十年後のことであるとしたら、それを数多くの社会的危機の横に並べておくというのは、あまりにバランスを欠いた認識であるだろう。

だからといって単純に、人間社会の問題よりも、人間社会の基盤となっている自然環境問題へのウェートを高めるべきだというのではない。人間社会が転換点を向かえていることは確かである。それは単純化すれば、向かうべき目標やモデルを、人類としてのスケールでも、国家、地域社会、家庭、個人のレベルでも、確かなものとして持ちあるいは共有し得ないということである。建前の上ではそれは、価値観が多元化し緩やかなネットワークで個人がつながれた、成熟した社会の現れなのかもしれない。しかしその場面的・刹那的なつながりは、その基盤をなす層の危機には現状のところほとんど無力にみえる。市場の、文化の、そして自然環境の危機に対する対処の混乱を、構造的に捉え直すことが必要ではないだろうか。

一方、地球環境問題とは、地球環境を人間の利用する資源と位置づけた上で、人間の築き上げた文明社会の維持の点からみての危機である。その意味では人間活動の基底にある人間存在と社会についての基本的考え方（モデル）の危機であり、格差、貧困、精神病理など、数多くの人間社会危機との相関性を無視しては実体を捉え損なうものといえる。

つまり、個々の問題を適切に位置づけ関係的に捉えることのできる構造的なスケールの認識が、我々にとって必要なのである。現象として現れる個々の問題は、それぞれの規模と対応の速度を要求している。しかしそれぞれの要求に速やかに応えようとする誠実さは一方で、それだけでは全体としての齟齬や矛盾をむしろ拡大してしまうことさえ、すでに我々にはなじみの深いことである。ブリューゲルがバベルの塔の絵に描いた、混乱という名の悲劇の構造と同じように。

以上のように地球環境問題を人間活動の構造的結果として捉えるとき、それは現代社会における個人存在の危機と存在論的に一致するものであると考えられる。本稿では、この二重の危機を脱するためには、人間にとっての“世界”を、存在論的認識と具体的地域生活との両面において再構築することが必要であるとの見方から、以下、危機と対処の構造（1)、危機の存在論的分析（2)、現代社会の状況的特質（3,4)、新たなモデルづくりの検討（5）を行う。問題に対処するための、我々の認識スケール策定の試論である。

１．自然環境の危機と対処モデル

地球環境問題と一言で呼ばれていることも、具体面では多種多様な現れ方をしている。そのまとめ方も一様ではないが、ここでは人間社会に与える影響面から、それらを４つのカテゴリ、12 の課題群に分ける見方[1]をもとに再整理する。

環境問題：　12 の深刻な問題の複合

（1）天然資源の破壊・枯渇

1　自然の棲息環境
森林、湿地、珊瑚礁、海底の破壊

2　海洋資源
安価なタンパク質（魚介類）の崩壊

3　生物多様性
連鎖構造の要素喪失

4　土壌
浸食、塩性化
農業基盤の喪失、生産力低下

（2）天然資源の限界

5　エネルギー、物質資源
化石燃料、鉱物

6　真水
河川・湖沼・地下水枯渇

7　地球の光合成能力

(3) 有害物質

8　毒性化合物

農業、生活、鉱山

9　外来種

動物、植物、害虫、病原菌

10　温室効果ガス

CO_2、メタン

(4) 人口増加

11　世界人口

食料、空間、水、エネルギー

12　環境侵害量

消費資源・廃棄物の相対比　(32:1)

(1)「天然資源の破壊・枯渇」は、一般に自然環境破壊と呼ばれていることの多くを占める。それは、食料、水、空気のように、人類の生物としての生存の基盤となるものの危機である。人間社会はひとつの閉じた系ではなく、自然環境と生態系の上に成り立っているのだが、その基盤が破壊され様態が変われば、人間社会自体の現存の構造は変化せざるを得ない。それが人間社会にとって好ましくない変化であれば、危機と認識される。

ここで問題となるのは、人間社会が一体・一様のものではなく、多様な社会構造、対立し合う利害・競争関係にあることである。共有地の悲劇と呼ばれる問題や収奪、格差問題を生む構造がある。さらに、生態系をなす連鎖的な要素関係は複雑で、充分に解明されていず、未知の損失や悪影響の可能性がある。

(2)「天然資源の限界」は、産業や都市など人間の文明の成長と運営、あるいは維持に必要なだけの資源供給が自然環境から得られなくなることである。物質としての地球のサイズが、文明の規模に不足する事態である。量的限界を超えたところから不足や枯渇の危機は急速に高まると予想されるので、文明社会の崩壊に備える必要がある。また物質供給不足の問題は金融市場と連動するので、文明社会全体の信用崩壊を伴う連鎖的で大規模なものになることも想定される。

(3)「有害物質」は、人間活動によって地球上の物質連関が変わることによってもたらされる危険であり、化学物質の人体や生態系への影響、温室効果ガスの気候への影響が問題となる。化学物質は、鉱山採掘に伴う資源抽出の過程での汚染から、農業や生活の営みによって環境へ流出、蓄積されるものなどがあり、人体に有害な（先天性欠損、精神遅滞、免疫不全などをもたらす）物質の長期残留、また浄化費用が巨額化するという問題がある。人の移動や移植による外来種問題も、地域の生態系を破壊し除去コストは大きなものとなる。温室効果ガスは地球規模での気候変動をもたらすが、農業や都市の構造など、個々の人間社会はそれぞれの地域の気候に適応した投資の成果であるがゆえに、過去の経験を越えた気候変動に対応できず大きな被害となることを、近年の自然災害[2]の増加は明らかにしている。この問題は、化石燃料に依存する文明構造に直結して考えられ、個別の活動の影響が地域に限定されず地球規模に至ること、さらに経済の発展と生活水準の向上や維持の国際的不均衡、排出元となる社会セクターの多層性など、地球環境への人間活動の影響を象徴するものとみなされている。

(4)「人口増加」は、人間活動の環境へのインパクトに、量的にもっとも影響を与えるものである。単純な総数増加だけでなく、新興工業国の発展、途上国からの人口移動など、より環境侵害量の大きい人口割合の増加が予想されるためである。

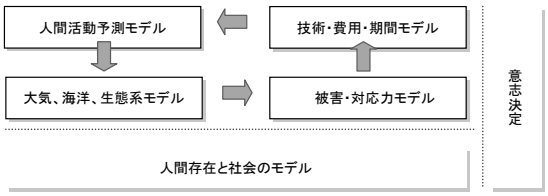
これらの問題群に特有なことは、相互に複合的なものであることと、問題一つひとつがそれ自体で決定的な結果をもたらすことである。問題解決にあたっては、特定の問題に対処しつつも、その問題が他の問題と相互関係していることを絶えず考慮しなければならない。そして、予想される限界状況が訪れる前に、すべての問題を解決済みにしなければならないということになる。一方、どの問題をとってみても、そのスケールと困難な障害の現実は明らかである。むしろ、全体としての破滅は避けられないものであり、人類のどれだけが犠牲となり、生き残るのは誰かと問うような、倫理とかけ離れた視点さえリアリティを持ちかねない状況である。

対応構造の複合性

複合性を特徴とするにしても、具体的な対処行動は、問題性と領域の両面で個別的なものを対象とせざるを得ないが、その具体的なありようも従来の専門分化した人の活動領域からみれば、複合的な領域構造を備えるべきものと考えられる。

当然のことながら、問題を事実として明確なものとし（科学）、具体的な対応方法を開発すること（技術）が必要であるが、一般的な工学的事例と異なるのは、自然環境の事実と人間社会への現れを適切にモデル化したうえでも、それをどう解釈し判断するかという認識上の価値観や政治が大きな課題となることである。

つまりモデル化には、事実分析だけでなく、人間活動の“あるべき”姿の想定という要素も含まれるためである。例えば、気候変動予測モデルは、要因、関係、変化予測を明らかにするためだけでなく、どのように気候システムを変えてゆくことができうるのかを明らかにするためのものである。そのためには、どのような状態への移行が望ましいかという考えとの結びつきを離れることは困難である。つまりモデルは、一階層ではなく、温室効果ガスの排出予測などの「人間活動予測モデル」、気候変化を予測する「大気、海洋、生態系モデル」、気候変化が人間社会に及ぼす影響を予測する「被害・対応力モデル」、取り得る対応可能性の結果を予測する「技術・費用・期間モデル」の、少なくとも４つのモデルを連鎖的に駆動するものであるとともに、その基層の部分で、あるべき人の生活をどう考えてるのかという人間社会のあり方についての、モデルの働きを認めなければならない。



科学調査は、工業社会化により二酸化炭素の人為的排出量が自然の吸収量を上回り、自然状態では280ppmとされる大気中の濃度が、現在は380ppmほどに上昇していることを明らかにしている。そして、今後450～500ppmに達すると、地表平均気温上昇が“危険な”レベル（＋２度）となると予測している。このレベルに達しないようにどうするかが課題となるわけであるが、450ppmに達する前が危険でないわけではない。すでに気候変動による人間社会の被害（災害）は増大している。農作物被害や渇水は、食糧不足や水不足の危機にさらされる人口の増加に結びつくが、現実の情勢は、その危機を人類全体が等しく受けるのではなく、気候変化の影響の地域性、また、国際的な経済格差による物流の偏り、社会的対応力の差異によって、危機の現実化も地域によって異なる現れ方をするのである。例えば水資源については、平均温度上昇が＋1.5～２度の範囲において水不足の危機を迎える人口が急増するとの予測[3]があるが、２度以上上昇して30億人が水不足に陥るまでは危険でないということはないのだ。誰にとっての危険を誰が認め、自分の行為に結びつけるかという、主体と倫理の問題がそこにはある。

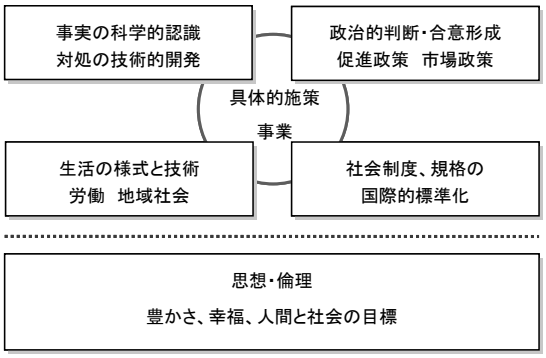
また、対策について、例えばエネルギー源として今後どのような技術を選択すべきかという点については、科学・技術の見地からだけではモデルを決定できない。そこには、石炭、石油、天然ガス、バイオマス、原子力、水力、風力、太陽熱、太陽光といった要素を、どのような配分にするかという選択の問題がある。化石燃料の割合を削減するとしても、各設備の環境破壊の程度、原子力に伴う事故の危険性や放射性廃棄物の問題、新エネルギーの開発・設置に伴う費用や期間の問題など、選択は、将来の人間社会がどうあるべきか、そのための負担を誰がどう担うのか、負担を受け入れ行動するための合意・意志決定のプロセスをどう実現するのか、という課題と不可分である。

政治領域の問題は、選択と合意形成だけでなく、新技術の開発と普及における障害を取り除き展開の速度を速めるための市場制御を含んでいる。当面は税制（環境税、炭素税）などによる価格政策が有効であると考えられる。

また、エネルギーと資源の有効利用促進には、社会制度、規格などについて広範囲で国際的な標準化を進める必要がある。そしてその他方にエネルギーや資源を使う側の、生活・消費のモデルをどう変えてゆくのかという問題がある。現在の先進国の生活モデルを生きる人口がこのまま増大するのであれば、他のどのような革新も改革も危機解消に間に合うとは考えられないからである。無論のことそれは、消費のボリューム

を小さくする方向以外ではあり得ないのだから、総量と圏域の両面における経済の縮減と同じことであり、産業社会や市場のモデルの変革、企業雇用を前提とした労働型人間像の見直しを伴うことになる。

以上のように見ると、地球環境問題への対応構造は、「工学」の領域とともに、「政治」、「社会制度・規格」、「生活・経済」の相互関係[4]として捉えられるべきである。そしてその関係をつなぐのは、これからの人間社会はどのようなものであるべきか、人はどう行動すべきかという文明論、人間存在論にあたる思想と倫理の領域であるということになるだろう。



言い換えれば、地球環境問題の対処には、「何が問題であるのか（科学）」と「どう対応するのか（技術）」ということだけではなく、「どこで何がどう変わるのか（地域性）」、「誰の問題なのか（主体性）」を問い直し、「痛みは誰のものか（当事者）」、「どのような負担を担うか（荷担者）」という意志と行動の問題につなげる必要がある。つまり、“現場で統一的に考える姿勢”をシステムに取り入れなければならないのであり、その背景には、「どうあるべきか（構想、共感、合意）」が問われるのである。

次に、どうあるべきかを問う前に、「何故こうなったのか」を問い直してみたい。

２．危機の起源

現実に“ある”問題に対して如何に解決するかに専念することは、一方で、何故そう“なった”のか、問題が何故生まれたのか、という問いを後回しにしてしまいがちであり、また同時に、誰の問題であるのか、という主体の問題を曖昧にしてしまう。

実際のところ環境問題は、環境（人間を取り巻くもの）が人間に突きつけている問題ではない。人間の活動がもたらした問題であり、この地球での人のありようが問題化しているのである。問題を対象とおくアプローチではなくて、対象との相互関係における主体の問題として捉えることのできる視座、ひいては人間の新しいありようを問うことこそが問題の本質とされるべきであろう。ここでは以下、立つべきところを、如何にではなく、何故を問うこと[5]の考察へと移したい。

科学技術と経済のグローバル化

人類史の上で文化は数多くあり、それに応じて自然観も多様である。人間と自然との対応関係としての技術の意味とかたちも多様である。しかし、西欧近代の“技術の目的のもとの科学との統合”といえる科学技術[6] techno-sciences のグローバル化は、西欧の近代的自然観を科学技術製品の利用習慣の内にグローバル化してきたのであり、そして自由市場の経済もまた同じ世界観によるものなのである。

西欧の近代性批判はすでに多く繰り返されてきたが、ここでは次に、自然環境の捉え方と行動の原理から概括し直してみたい。

ふたつの人間中心主義と技術・制作的存在論

近代性批判のひとつの論点は人間中心主義 anthropocentrisme に対するものである。これは、すべての文明にみられる自民族・自己（個人）中心主義と区別される、近代科学・人文主義・個別主体によって特徴付けられるものである[7]。同じように人間中心主義と呼べても、そこには大きな違いがある。それは、人間のありようにおいて、前者がそれぞれの人に個別性（互いに一致しない理性のありよう）をみるのに対して、後者は普遍性（つまり人間存在）をみることにある。一人ひとりの現実的な人間の基盤として、普遍的な人間存在をおくことは、その根拠に普遍的な理性を、またその裏返しとしての数学的世界観（かつ物質的自然観）を据えることによるものである。

これは、ふたつの中心（人間と宇宙）を持つ構造として捉えられる。両者は別言すれば主体と客体であり、根本的に分裂している。ひとつの中心である宇宙は数学的構造をしており、他方の中心である人間は、理性的にそれ（真実）を知ることができる。“現実”とはすなわちそのように“ある”ということである。ロゴ

スとは、世界の内的法則を表現する人間理性の能力のことであり、すなわち言語である。

この正しく表現できる（真実を我がものとする）能力は、必然的に世界（客体）の具体的現れである目の前の対象を操作することに結びつく。つまり、理性と事物の制御がひとつのこととして結びつくのである。近代とは、ヒルベルトの純粋数学に代表される純粋理性の解放を特徴とし、このモデル（理性と事物制御の一致）の一般化をその本質とするのである。このような人間と世界の捉え方（制作的存在論）において、“技術”は特有のありようをするようになる。

もとより人間存在と言葉＝道具は不可分のものであり、言葉＝道具を抜きにした存在論を想定すること自体困難である。しかし、人間・宇宙の根本的分裂と理性・制御が体系的に結びつく制作的存在論においては、個人は普遍的人間存在に基礎づけられ、具体的な技術の現実に対する責任との絆を持たなくなるという問題性を含んでいる。

理性と世界（事物操作）の統一観は、必然的に人の感受性と共通感覚の排除（抽象）を意味するのだが、個々の感受性を備えない人間に、主体としての責任を問うことは原理的にできないのである。

近代性批判の対象となる技術とはこのような存在論的問題に捉えられる。

なるとつくるの統一

古典ギリシアから近代までの哲学史を、なる（生成）とつくる（制作）の緊張関係の変遷としてみることができる。自然の語源（hylē 材料、physis 芽生え生成）からもたらされるのは生物主義的世界像であるが、それとは別の数学的世界観（物質的自然観）との、対立と統一の歴史としてみることである。

近代とは、定則の把握と技術化によって、環境を主体的に形成することができる人間の時代である。制作的存在論が意味するところはそれであり、結果として、何が存在し存在しないかを決定する役割を人間理性が果たすことになる。それは一見不遜のようでいて、現代人にあまねく広がる世界認識の基準でもある。誰も霊魂や妖怪の存在を認める方法を持ち合わせていないのである。つまりそれは、人間理性が明確に認識できるものだけが自然の内に現実に存在するという世界観の一般化である。

無限のモデルと有限の世界

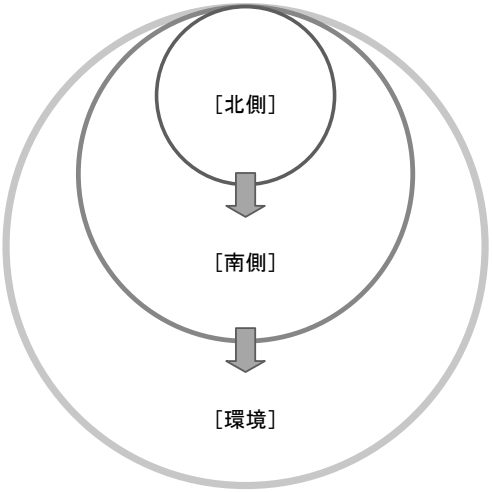
西洋化というグローバリゼーション（西洋の教育、医療、司法、行政、技術、諸制度の適用、さらには生活様式の一般化）への批判が環境問題と同じコンテクストにあることは、西洋近代の基礎にある制作的存在論の一般化という構造においてもみてとることができる。

グローバリゼーション批判は、経済成長（資本蓄積）の一般化に対するものである。競争が不平等を拡大し、自然の略奪をまさに限界まで進めている今日の現実に対するものである。それが征服欲や悪意によるものでないとすれば、何をして批判の対象とするべきなのだろうか。発展（＝開発）がすべての人類の目標であるのであれば、批判は原理的なことには及ばないことになる。

西洋化が制作的存在論（という人間存在のモデル）を受け入れることであるとき、“経済”という仮説（モデル）の構造的矛盾を自分のものとすることになる。経済がグローバル（非空間的）な現れ方（活動）となるのは、数学的モデル（世界観）に準じることだともいえよう。数学のモデルが基本的に無限である一方、経済の現実世界は有限である。この明らかなことが具体的な活動においてほぼ無視されるのは、数学など知らなくても、自然数の無限を誰でも自分の認識の内に、すなわち操作可能な手の内にあると信じて疑わないことと相似である。

人が一生かけても自然数を数え上げることはできないのに、小学校の低学年児童でも、原理的にはあらゆる足し算引き算を解けるという揺るぎない自信を自然に持つ。ここにあるのは、普遍的人間の自由・可能性と、各人固有の自己の現実・自分の居場所との、二重性である。

経済発展（競争）は必然的に敗者と奪われる者を生むが、敗者の個別的現実よりも勝者のそれのみに人が目を向けてきたのは、実際的には、経済理論の抽象性を理性が自分のものとしたのではなくて、歴史的なありようとして、その矛盾を外部に転嫁し、内部には成長しかないように見せてきたためである。先進国（北側）の成長は、矛盾を外側（南側）に転嫁してきたためであり、それがさらにその外側（環境）への負荷拡大へと転嫁されたのであるが、その破壊された環境の外にはもう何もないというのが今日の現実だ。



有限の世界で無限のモデルを運用することが、生態系の再生能力を上回る生産・消費活動として現実化してしまったのであるが、ここには原理上、もうひとつの危機がある。それは、数学的モデルは日常的な意味での時間性を持たない（時間軸に対称である）ということによるものだ。他方、現実世界の時間は一方方向にしか流れないものである。生物が生まれ、成長し、死ぬことを逆方向に進むことができないように、進化も、地球の成立も、総体として一方方向である。つまりそこにあるのは一回性という生命・生態系の本質であり、絶滅や破壊の再生は、不可能か、可能であるにしてもきわめて難解なことなのだ。

さて、地球環境問題の起源に西洋の自然観＝制作的存在論をみるとしても、その解決は、非西洋的な自然観の採用に期待するというわけにはいかないだろう。なるほど自然環境に対する人間の認識と行動の根拠を求めるに際して、東洋的な自然観とそれに基づく倫理の構築には可能性があると考えられ、実際に少なからず期待されてもいよう。しかし一方、我々は人間と世界についての基本的な考えをあれからこれへと容易に取り替えることができるものではないし、また、現代の特有の状況もある。それを知覚と社会システムの面から整理し直しておこう。

３．知覚の現在：メディア的世界と地球環境の危機

人が外界をどのように認識するのか、ということを考えるためには、人間の身体的感覚器官からはじめることは妥当だろう。その際、人間の神経系をセンサーと処理系というコンピュータのアナロジーでモデル化する認知科学の取り組みは我々に多くを教えてくれる。身体器官という点においては、我々現代人と、少なくとも５～４万年前の我々の先祖とは、同じ人類として共通のものを備えている。果たしてそれは、他の哺乳類、動物、生物と、原理的には変わらないものなのだろうか。

センサーの能力の違いや処理プログラムの複雑性・特異性の違いはあるにせよ、コンピュータによるシミュレーションでは原理やアルゴリズムのレベルにおける種の違いはあまり見られないだろう。

違いが出てくるとすれば、処理速度に飛躍を求めるときである。視覚センサーが捉えた光の波長の強さと差異データから、意識の上にオブジェクトを形成するには、高度な生物ほど膨大化する形態データベースとのマッチングを行うことになる。この計算時間を単純に処理系の速度に任せるだけでなく短縮するには、形態間の相互関係の体系に配置し直し、計算量を縮約する工夫が有効である。これは音の音素への、そして音素から単語、そして文へというときに、ボキャブラリと統語という構造による働きと同じである。

これは複雑な生物には程度の差こそあれ容易に観察されることである。そして人は、他の生物を見るときに、その反応に統語＝体系の働きを感じると、そこに擬人化した親近感を感じるのだと思われる。

さらにこのアナロジーを続けてみると、センサーからの入力なしに（小さな入力で）、統語の構造の側を大きく駆動する働きを想定することができる。つまり、見えないものを見ることである。これは生物一般では感覚異常であろうが、人ではそうではなく、自然な想像力の働きとなる。

空の向こうに想いを馳せる。死後の世界を深く考える。身体感覚が及ばず、自己の生命活動とは接点のないことが、複雑に体系化される。人間においては、直接感覚を処理するための参照体系と、この想像を展開する象徴の体系とが相互関係し合うという、重層的な統語構造を特徴とするといえるだろう。

“あるもの”からの感覚刺激から“あること”を知る、という動物身体的反応モデルよりも、なんらかの刺激が“すでにある”意識世界を動かし変化・発展させるというモデルの方が、より人間のものとしてふさわし

いと考えられるのである。その意味で、科学的知識およびその体系と呼ばれるものも、実在に対応した真実の集合といった19世紀的な捉え方ではなく、芸術的世界や神話の体系と本質的に同一と見る見方が今日的である。

人間らしさを問うときに、動物身体の高度さをその根拠に置くことはないだろう。むしろ我々は遠い先祖と同じ身体を、ほとんどその能力の最低限にとどめるような乏しい使い方をしながらも、より複雑で高度な世界に生きていると感じている。そのことは、文化一般を論ぜずとも、知覚表現としての詩作を見ても明らかである。

北山にもみぢ折らむとてまかれりける時によめる　つらゆき

見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり

（古今297）

詞書きの「まかれりける」とは、まかり＋あり＋ける（＝き＋ある）、と文法（統語）の上で解釈され、単純な過去ではなく意識の現在、つまり“今はないことが意識の今にあること”という統語的世界に人を導く。詠われる時は無論夜ではなく、「夜の錦」は、史記の項羽本紀「富貴不帰故郷、如衣繍夜行、誰知之者」（出世して故郷に帰らないのは、立派な着物を着て夜歩くのと同じで、誰にも知られない。漢書項羽伝では「如衣錦夜行」）を想起させ、甲斐のないこと、という観念の表現であるとともに、見えないもの（しかしあるもの）という感覚の二重の働きを喚起もする。

語が音や字の、また文は語の、総和ではない[8]ように、文自体もそれだけで存在するのではなく、統語的意識の世界との関係を、動的に作り替えてゆくのである。

このような、人間が知覚できる／知覚する世界と、人間が生きる／生きるべき世界との緊張関係こそが、（歴史上の社会、文化において、明示的な扱いが少数者の階層に限られていたとしても）基本的には人が人であることの本質に関わるといえる。

そして今日の社会は、メディアの発達によって、物理的存在－刺激に対して、統語的意識世界の割合が大きく肥大化していることを特徴としている。それは技術史的に見れば、マスメディアやインターネットの社会的発達に先行する、神経系の道具としての写真術の誕生に由来するものである[9]。

現代人が生きる世界についてみれば、個人的な直接経験から構成される部分は相対的に小さなものであることはすぐにわかる。実際のところ人の意識世界を構成する要素の大半が、カメラ・映像機器を通したビジュアルによって占められている。ビジュアルを視覚経験と区別しないのは、映像機器、さらにはメディアのシステムが、我々の意識の上で身体的感覚器官の道具的延長であるからである。加えてビジュアルの図像的操作技術の発達は、見られるものの物理的存在との関係よりは、図像間の統語的関係における展開によるものの方の量的割合をはるかに拡大させることになった。テレビ番組の中で、ニュース映像よりもドラマ映像の方が量的に多く、さらにはニュース映像さえドラマ性を帯びている。

表現が表現を生む統語的再生産メカニズムがメディア的社会の特徴である。

そして、地球環境問題は、この意識世界に偏った社会に対して、物質存在からの揺り返しでもある。バーチャル世界の豊かさをいかに増そうとも、地球温暖化による気候変動は人間社会を襲うのである。

４．グローバル化と個人化：人間の危機

物理的環境（直接性）と意識的世界（統語性）との緊張関係の構造は、今日の社会と個人との関係にも対比的に見られるものである。それは、社会構造と労働の意味・かたちの変遷を追うことによる。

人間の労働の原初的かたちは、地域的差異によらず構造的には、自然的実体性に直接的なものである。その名残は、農業において今日でも垣間見ることができる。近年の農業はかなりの程度まで工業化されているとはいえ、その本質は、個人が自然と、そして家族という実体性と直接的なことである。一方、商工業に就くこと、翻っていえば会社員になることは、労働を反省的に捉え、特定の人間集団の特定の役割を意識的に選び取ること、少なくとも選択に身をさらし、そのうえでその特殊な存在者となり得たことをその特殊集団から承認されることを、自らの目的として据えることである。

ヘーゲルを参照すれば、これが西欧の歴史における市民社会の形成過程の原理に相当しよう[10]。個人が集団的カテゴリから解放されて、自らの人生を運営する

に至る階梯である。言い換えれば、近代的個人主体のモデルを社会システムと成員の内に現実化するプロセスが、社会の近代化であった。そしてその先に位置する現代社会の問題は、近代性モデルを生きる個人を襲う、その本人の具体性における危機の一般化なのである。

特定集団から承認される特殊な存在者となり得ること、つまり“ひとかどの者となる”ことの充実は、競争社会の中では少数者にしか現実しない。勝者は数的に多くの敗者の上にしか現れ得ず、仮に集団の誰もを勝者とするためには集団の外に大きな敗者集団をつくること（矛盾の外部転嫁）が必要になる。

このモデルを現実化することによって構造的に生まれる多くの敗者にとって保障となるのは、伝統的には家族であり地域社会であった。しかし、反省的身分の獲得が、直接的な身分すなわち家族および地域社会（的人間関係）の否定の過程と同じである以上、その過程を経てきた現代の個人は家族の保障の外にいることになってしまう。会社員になれないものは自動的に失業者になり家族の中でも異端者なのだ。

もちろん、西洋化というグローバリゼーションのなかでも、このような西欧近代の主体モデルの危機が、そのまま他の文化社会の中で同じように顕在化するとはいえない。例えば日本社会では、家族の事実上の姿が西欧的な個人化を現すものであるにしても、家族の象徴はそのような目に見えるかたちとは自律的に、日本社会の起源である農村的な家における共同体的な依存感覚を保ち続ける。事実の場に対して象徴の場は異なる速度を持つのである。

しかしそれにしても、その差（速度）は時間の遅れを意味するだけであり、すでに現在の日本社会では、象徴の場の崩壊が事実の場の変化に追いつきだしているのかもしれない[11]。都会の敗者にとって、帰れば何とかなる田舎は、意識の内を除けば、もはやどこにもないのである。

５．二重の危機に対して：人間らしく生きる、新たなモデルと基軸

近代性批判の立場からみるとしても、人間中心主義と呼ばれるものはそれ自体、その名の通り人間の解放の思想であり、批判される西洋化が民主主義を含むように、それは人が人間らしく生きることを追求するものであることに違いはない。

それでは、地球環境と個人化の問題を、西洋の古典的近代パラダイム（Occidentale Moderne Classique）に基づく人間・社会のモデルの構造的破綻の二つの現れであるとすれば、新たな人間らしさ（存在論）をどこに求めるべきであろうか。

再び、問題は頭の中にではなく目の前の現実にあるのだから、という“如何に”の議論に陥らないためにも、人間の世界は事実 fact から成り立つものではないことを再確認したい。人のありようから独立した事実とは科学（物理学）の仮説である。現実の世界の住人である人は、“ある”ことを感知できなかったり、“合理的”に失敗もするのである[12]。

人間にとっての世界は、事実としてあるではなく、何か“として”ある（場所 / 述語の論理）。人間は、環境を人類という生物種に捉えられる現実として、さらに自分が属する歴史 / 文化的な現実として、生きるのである。それはベルクによれば次のように関係構造化できる[13]。

（環境（Umgebung）を、環世界（Umwelt）として）を、世界 = 風土（Milieu）として

そこで、制作的存在論に対する風土的存在論とは、分裂（分ける）に対する相互関係（繋がり）において特徴付けられるだろう。それは、人と人との相互依存であり、人間と自然との相互依存関係である。繋がり・相互依存関係の認識とは、その現れ（行動）において、「常に責任をとる」持続性の約束として表れることになる。

無限ではなく固有の領域を持ち、普遍ではなく個別の存在の論理を持つものであることは、人間の住まう領域が空間的な意味でも地域性を持つということである。

このような志向の上では、セルジュ・ラトゥーシュが提示する“脱成長”décroissance の理論とローカリゼーションの枠組みに、地球環境と個人化との、二重の人間の危機への構造的な対処法をみることができるのではないだろうか[14]。

ローカリゼーション

ここで地域とは、住まう人にとってアイデンティティの承認の場であり、（地域の）万人にとっての財

の保全を配慮する生活の場である。ここでは、生活の個的・地域的な質が追求されるので、必然的に労働の意味と構造が普遍モデルの社会とは異なるものに変容する。普遍型社会では、労働は規格・専門化された職能の実現であって、それ自体がユニバーサルな競争の場となり、結果的に多数の敗者と無力感を生み出さざるを得ない。他方、地域型では固有の自己の発見と実現が基本となるので、意味や価値を追求する綜合的な文化的活動が労働と不可分になる。普遍的経済活動では、価値基準がユニバーサルであるので、競争は量的にならざるを得ず、収穫逓減と希少性発明の、無限の拡大再生産サイクルを繰り返すことになる。絶えず必需品・需要を作り上げなければならないということは、逆にみれば不満と困窮とを絶え間なく創造し続けるということである。逆に地域性とは多元性であり、そこでは成熟が目標となるのだ。

普遍型社会の構造的欠陥：

距離感の喪失　　反省的実体性（職業集団）

・場当たり的接続（フラット化＝場面化）

・共有地の悲劇

・法律を守って欲望を最大化

地域に住まうこと：

利害の一致　　直接的実体性（家族、自然）

・信頼し合う

・意見を交換する

・共通の未来・後継者

今日、地域経済の再生を目的とした地域経営の現場では、地域資源の発掘・発見をテーマに掲げる事例が多いが、本質的にみればそれは制作的存在論・普遍社会の構造によるものに他ならず、収奪行為と変わらない面を持つ。つまり自然資源を残らず商品化し続けるメカニズムと同じである。むしろ商品化できない／しないものを明らかにすることこそが本来の手法であるべきである。

このようにグローバリゼーションに対するローカリゼーションとは、自然および社会の資源化・商品化ではなく、自然環境および社会関係に、自分の生活様式を適応させてゆくプロセスであるといえよう。

個々人の能力としては、具体的な環境・関係への感受性を増すことが重要であり、社会制度・合意としては、財の一方的な蓄積ではなく互酬的な持続体制をシステム化することが目標となる。

経済概念の拡張

ローカリゼーションの特質としてあげたこのような志向は、資本主義社会の経済合理性批判としては必ずしも新しいものではない。バタイユは、生産・蓄積過程（利益を求める合理的損得勘定）だけでなく、消費・蕩尽過程（宗教・芸術を含めた非合理的な享楽＝呪われた部分）を含む「一般経済学・普遍経済学」を構想した[15]。経済合理的には“損失”にあたることが、人間的な幸福や喜びに対応することに注目したのである。バタイユは新しい経済学の構築に未開社会の「贈与経済」を参照するが、ラトゥーシュも同じように、文化的な自律性を維持する「ヴァナキュラーな社会」のモデル（イリイチによる）を再三引きながら、市場よりも互酬性を原理とし、「関係が財に取って代わる」[16]贈与の論理を強調する。新・族的経済（連帯的経済）oeconomie néo-clanique と呼ばれる、アリストテレス的オイコノミア oikonomia 概念の展開である。またそれは、人間の潜在能力アプローチ、つまり諸個人の多様性の実現を経済学の問題設定に含めるアマルティア・センによる経済学の拡張の志向とも重なるものである[17]。

しかし、経済合理性の過大な適用が地球環境問題を拡大しただけでなく対応を実践の上で難しくし、地域社会の生活実態と家族の実体を解体し個人を危機状況に陥れていることは明らかであるにもかかわらず、経済合理的枠組み視点に立つ限りは、経済規模の縮減という提示された方向性それ自体が、マイナス成長であり雇用の減少・喪失と貧困の増大に直結する、一層受け入れがたい危機の増大にもみえる。

経済学の対象となる経済を概念の上で拡張することによってそれに応えるためには、人間社会の目的としての幸福と富の概念を再定義するだけでなく、よりリアリティのあるかたちで提示する必要がある。そして、縮減の上での生活の質の保障基盤を納得のゆくものにしなければならない。

人の自由、レジャー

イリイチは現代的な意味での貧困を、拡大する経済・

消費の格差の問題とは区別して提示する。それは、市場システムに組み込まれて生きるしか無くなった現代人が、経済的に豊かであるにせよそうでないにせよ、自力で行動し、創造的に生きる自由と力を奪われているという、根の深い無力感から生み出されるものを指している。経済的貧困からくる生命の危機に対して、生きる意味､意欲の喪失というかたちでの危機である。イリイチーラトゥーシュの経済の縮減は、増大する経済的貧困の危機以上に、この無力感の危機を打開ですると意味を持っているのだ。

そしてまた今日のローカリゼーションは、もはや過去の閉鎖的社会のような人の封じ込めに繋がるものでもない。インターネットを基盤としたもうひとつの環境と関係はすでに人類の現実世界である。普遍型社会の問題は、それを資本と商品の領域におけるグローバル化に適用したことであり、それは必然的に文化、生活、自然の収奪（自由を奪うこと）を結果することになったが、逆に思想の自由はネットワークの開放性にこそあり、思想を地域にとどめる必要はない。

アリストテレス的オイコノミア概念を展開しようとすることは、原理的に、アリストテレス的レジャー概念に新しい位置づけとかたちを与えることでもある。それがイリイチのいう現代的意味での貧困の打開であろう。

マイナス成長の恐怖は、人の踏み出す勇気を挫くものであるが、生きる意味の再生、レジャーの再興が、それを支えてくれるのではないだろうか。

おわりに

近代性批判の立場からは、地球環境問題は、人類の文明が直面する新たな技術的課題ではなく、文明の原理そのものの構造的限界を明らかにするものであると考えられる。人間と社会とが一体何であるのかという、存在論的な問い直しを必要とする課題である。

もちろんそれは技術的課題設定を無効にするものではない。具体的な事態には実際的に応えることが必要である。重要なことはそれぞれの対処行動の基となる原理を新たに立て直すことなのだ。

とはいえ、経済について、空間的にも量的にも規模を縮減することは、マイナス成長という合意の得られない選択を意味し、また人間活動の多くを非経済的関係に戻す地域の生活とは、この金銭社会に深く結びつけられた生活のうえで、いかにも非現実的で実行不可能なように見える。

しかし、今や原理を変更するべきことが明らかであるとすれば、課題は移行をいかに速やかに行なうかということになる。むしろ我々が消費社会で培った経験は、人の意識が転換すればかたち（モノと制度）は驚くほど速く変化することを明らかにしてきた。そして意識の変化の端緒は、すでに至る所に現れだしているのではないだろうか。

そのようにみれば、都市と家族のかたち、労働、教育、創造活動のありかたについて、ひとつひとつを新たな原理の基で作り替えてゆくことは、充分にリアリティのあることだと考えられる。具体的には政治的リーダーシップと合意形成のネットワーク的構造との結びつきが課題であるだろう。

地球環境問題の“何故”を問うこと、つまり風土性の存在論に基づく新しい世界（社会＝自然関係）の探求は､住まうことの結びつき（ローカリゼーション）と思想の結びつき（ネットワーク的自由）との綜合によってなる人間の場所をつくりあげることである。それぞれ別の領域課題にも見える環境危機対処と人間らしさの追求とを、ともにそこに設定し直すべきであると考えられるのである。

1　ジャレド・ダイアモンド１,『文明崩壊』，草思社，2005/12/21 より、第 16 章をもとに整理した。

2　ハリケーンや洪水、渇水、熱波、寒波など、農作物被害だけでなく、都市生活者の命を奪う例も増加している。

3　Parry, M. et al., Millions at risk: defining critical climate change threats and targets, Global Environmental Change, 11, 2001, pp.181-183.

4　この相互関係図式の具体的展開例を、トーマス･フリードマンが行なった新エネルギー政策への分析にみることができる。『グリーン革命　〔増補改訂版〕　―温暖化、フラット化、人口過密化する世界』，伏見威蕃訳，日本経済新聞出版社，2010,（下）pp.62-111

5　「このような存在論は「いかに」－手段と道具－の存在論であり、「なぜ」－存在理由と行動理由－の存在論ではない。世界を説明し支配しようと努力を重ねる近代は、実のところ、「なぜ」から「いかに」への置き換えをはかる壮大な転換のプロセスに他ならなかった。近代はそれまでのいかなる文明にもまして、事物

がいかに機能するか、事物をより効率的に操作するにはどうすればいいかということを私たちに教えてきた。同時に近代は、何かをする理由よりはその仕方に気をつかう方向へと、人間を導いてきた。その点において近代は、倫理を根絶やしにする壮大なプロセスであった。」オギュスタン・ベルク,『地球と存在の哲学』, ちくま新書, 1996, p23

6 「自然科学が技術の基礎なのではなく、現代技術のほうが現代科学を支える根本動向 Grundzug なのである」ハイデッガー,『技術への問い』, 関口浩訳, 平凡社, 2009, p.166

7 ベルク , pp.26-27

8 ロラン・バルト,『物語の構造分析』, 花輪光訳, みすず書房, 1979, p.5

9 ヴィレム・フルッサー,『写真の哲学のために―テクノロジーとヴィジュアルカルチャー』, 深川雅文訳, 勁草書房, 1999, pp.40-41

10 ヘーゲル,『法の哲学』, 中央公論新社, 2001, II §202-206, pp. 123-131

11 オギュスタン・ベルクは、西洋化する日本社会において、依然として強く作用する象徴の場の構造を描き出した。Vivre l'espace au Japon, 1982（『空間の日本文化』, 筑摩書房, 1985, 1994）, Ⅲ -1- 家細胞
原著からおよそ 30 年を経て、形式を保持する（日本社会の）文化傾向は崩れだしているのだろうか。

12 ダイヤモンドは、文明社会が破滅的失敗を招くことを以下の問題構造に分析している：
1. 予期の失敗　－未経験、経験の無視、誤類推
2. 感知の失敗　－能力外、遠隔管理
“這い進む常態”、“風景健忘症”
3. 合理的行動　－少数の利益（多数の損失）、
共有地の悲劇
4. 非合理的価値観　－基本的価値観の固執、埋没費用効果
5. 非合理的行動　－短期 / 長期の動機の衝突、群集心理、
心理的拒絶
6. 解決能力不足
ダイヤモンド, 下, 第 14 章　社会が破滅的な決断を下すのは何故か？

13 犬塚,「来るべきコスモスを担うもの」, 実践女子大学生活科学部紀要 no.47

14 セルジュ・ラトゥーシュ,『経済成長なき社会発展は可能か？――〈脱成長〉と〈ポスト開発〉の経済学』, 中野佳裕訳, 作品社 , 2010

15 ジョルジュ・バタイユ,『呪われた部分 有用性の限界』, 中山元訳, ちくま学芸文庫 , 2003

16 ラトゥーシュ ,p.118

17 アマルティア・セン,『福祉の経済学 ― 財と潜在能力』, 鈴村興太郎訳, 岩波書店, 1988

18 イバン・イリイチ,『生きる思想 ― 反 = 教育／技術／生命』, 桜井直文訳 , 藤原書店, 1991, 1999（新版）, pp.55-60